

特別活動

人とのかかわりの中で、喜びを共有する子供の育成

～学びの実感を持って、他と喜びをつなげる活動の展開～

「もっとこんなふうにしてみたい!」「なるほど、そんなこともできるんだ!」子供が友達とかかわりながら、自分の思いや願いを膨らませていけたら素晴らしいですね。そして自分の取り組みが、他の役に立っているんだという実感を持つことができれば、一人一人が輝いていくことでしょう。2年次は、人とのかかわりの中で感じた喜びを他につなげていくことを中心に研究してきました。

(特別活動主任 鈴木 教益)



1 研究の経緯と本年度の研究の方向

(1) 研究の経緯

昨年度より研究主題「人とのかかわりの中で、喜びを共有する子供の育成」及び副主題「人間関係調整能力を高めながら、喜びをつかむ活動の構想」のもと、人間関係調整能力を高める活動過程の工夫や、人とのかかわりから喜びをつかむ活動の在り方を中心に研究を進めてきた。

その結果、教師は人間関係調整能力の活用を図る視点を意識して子供の活動を進めていくことの大切さを実感し実践を重ねるとともに、子供は人とのかかわりにおいて他を意識した自分らしさを発揮できるようになり、集団の中で自己存在感を味わえるようになってきている。また、子供は、ゲーム等の体験の中から人とかかわる上で、あいさつや相手の気持ちを考えた言葉かけなどの大切さを実感し、相手と接する時の表情や具体的な言葉かけなど、獲得したスキル(言葉や表情など人によりよくかかわるために必要な術)を学級活動の中で発揮していけるようになってきている。課題としては、個人がつかんだ喜びを他につなげていくための具体的な方策や支援の在り方についてさらに検討していくことが挙げられる。

(2) 本年度の研究の方向

特別活動部では、「真の学び」を「体験的・実践的な活動の中で人間関係調整能力を発揮し、主体的な活動を通して得た喜びを他と共有すること」とし、「真の学びをつかんだ子供の姿」を「自ら人とかかわる中で人間関係調整能力を発揮し、活動から学んだことを他と喜び合う姿」とした。このような子供像に向けて、本年度は、子供自身が人間関係調整能力を発揮しながら活動の実践を積み、子供同士の心の中で感じたことや考えたことを互いに伝え合いながら、他と喜びをつなげていくための有効な手立てを考えていきたい。そのために自分と他者との間で活動が成立したときに、個人でつかんだ喜びを共に活動にかかわってきた友達に伝えたり、相手の気持ちを受け止めたりすることを通して、子供自身が「自分のがんばりが相手の役に立った」と自己有用感を高めたり、「このところをもっと・・・」と新しい学びを見い出したりしていくことを大切にす。さらに、子供自身に生まれた「もっと」の思いの解決に向けて、一人一人が実感した様々な学びを集団の喜びとして互いにつなげていく姿を目指していくこととした。

そこで、「学びの実感を持って、他と喜びをつなげる活動の展開」を副主題とし、「他と喜びをつなげている姿」を「活動から得た喜びや活動をよりよくしようとする思いを互いに伝え合い、さらにかかわり合おうとする姿」と、とらえた。そのために、本年度は以下の2視点を中心に研究を進めることとした。

- | |
|---------------------------------------|
| (1) 他とのかかわりから喜びをつなげ、取り組む意欲を高めていく活動の工夫 |
| (2) 「もっと」の思いを生かして学びを進める活動の工夫 |

活動に取り組む際、発達段階によって見方や考え方に違いがあるので、人間関係調整能力を学

年に応じて発揮していくことが大切になる。今年度の研究においても、人間関係調整能力や自らの学びを成立させていくために必要なスキルを大切に考え、実践の場で子供自身がよりよい関係を築いて他とつながる喜びを実感できるよう昨年度の研究の成果をもとに進めていくこととする。

2 研究の内容

(1) 他とのかかわりから喜びをつなげ、取り組む意欲を高めていく活動の工夫

これまでの学級活動内容(1)では、子供たちの創意工夫を生かして自発的に進めてきているが、他とのかかわりやつながりを生かすことで、子供一人一人の活動意欲や自己有用感をより高めることができると考えた。そこで、学級活動の内容によって活動範囲を広げていくことを支援し、かかわりからつかんだ喜びを子供たちが互いに伝え合う姿を目指していくこととした。さらに、活動を通して生まれてきた学びをもとに、新しい課題に豊かな発想を持って取り組んでいけるよう、喜びをつなぎながら取り組む意欲を高め、実践を通して学級全体が活性化していくことをねらいとしていく。

ア かかわりから学びを実感するための活動の在り方

子供たちは学級で生活する中で、人間関係を築き友達とかかわる楽しさや喜びを感じているが、より多くの仲間とかかわりを持つことで、さらに互いを認め合ったり自信を深めたりと、学級内では得られなかった喜びを実感して楽しさを広げていけるだろうと考えた。

実際に活動を始めるには、提案を発信する学級とそれを受信する学級において、それぞれに役割分担をした上で当日までの運営を進めていくようにする。その際、下学年では、教師が中心となって働きかけを行い計画委員と共に計画立案し、上学年では子供の思いを生かしながら、活動のねらいに沿った支援を行うというように、学年の発達段階に応じて自発的・自治的に活動を進めていけるようにする。そして、やってみて感じた体験の喜びから自分たちで進めていける自信を深め、みんなに役立つ活動の楽しさを味わい、自主的に取り組めるようにしていく。

【他学級とかかわる集会活動 6年「学級対抗綱引き大会を開こう」】



一人一人の力を合わせ学級の連帯感を感じて取り組める内容を時間をかけて話し合い、実践につなげた。

つかんだ喜び

- ・自分たちの活動の広がり
- ・友達の輪の広がり

学びの実感

イベントが決まるまで意見がまとまらず大変だったが、他の学級のことも考えながら納得するまで話し合ったことで、みんなが楽しめる内容になった。

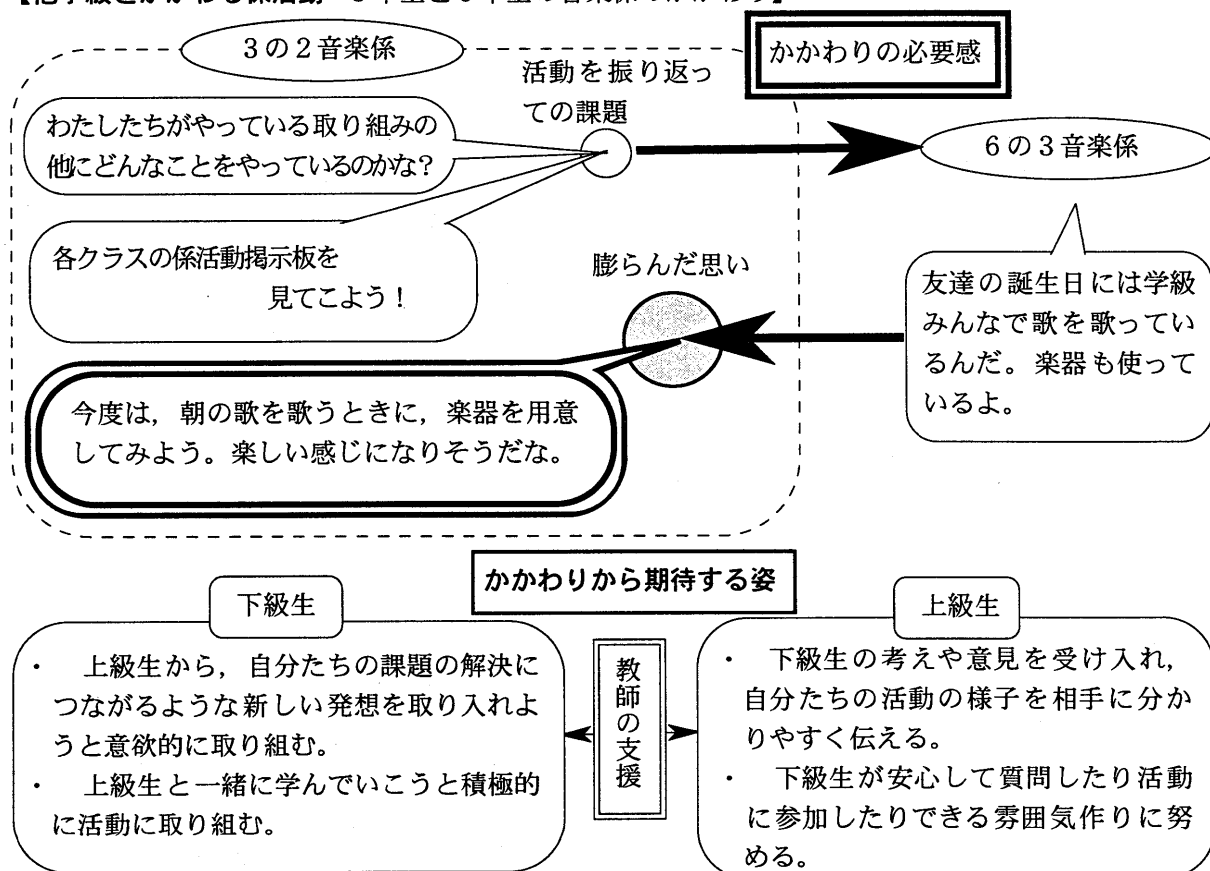
イ 他とのかかわりから活動意欲を高め、進めていく係活動の在り方

これまでは、係を構成するメンバーで互いの発想を生かしながら活動内容を話し合い、計画・実践へと進めてきた。そこで、学級内だけで進めてきた活動に他とのかかわりを生かしていけば、新しい発想を得たり、これまでの取り組みを見つめ直したりして係活動を進めていく意欲や自己有用感をさらに高めていくことができるだろうと考えた。そして、学級において一人一人が活躍するようになれば、学級全体が活気づいて望ましい集団につなげていくことができるだろうと考え、そのための活動の在り方を探ることとした。

まず始めに、メンバーで立てている計画書の内容を確認したり、振り返ったりすることの見直しの場から課題を見つけ出すようにする。その解決に向けて、係活動一覧の掲示板を活用し、自分たちに関連する係を見つけて、他学級・他学年の係とかかわる機会を持つようにする。ここでは、活動の様子を実際に見学、体験して、アイディアやアドバイスをを得ることで、新しい発想や取り組みの見通しを持ったり、問題の解決が図れたりすることができるだろうと考える。例えば3年生が新しい係活動に取り組む際、次ページの図のように、掲示板から同じ活動内容の学級を見つけ、上学年とかかわるきっかけを持てるようにする。そして、実際の活動の様子

を見学し上級生のアドバイスを得て、自分たちの活動を工夫改善していったり、新たな発想を取り入れたりしながら、より広がった活動を生み出すようにする。

【他学級とかかわる係活動 3年生と6年生の音楽係のかかわり】



(2) 「もっと」の思いを生かして学びを進める活動の工夫

子供たちが他とかかわりながら係活動や集会活動を進めていく中で、つかんだ喜びや成果から生まれた「このところをもっと・・・」という思いを大切に、学びの視点を広げることができれば、さらにかかわり続けて学びを進めることができるだろうと考えた。

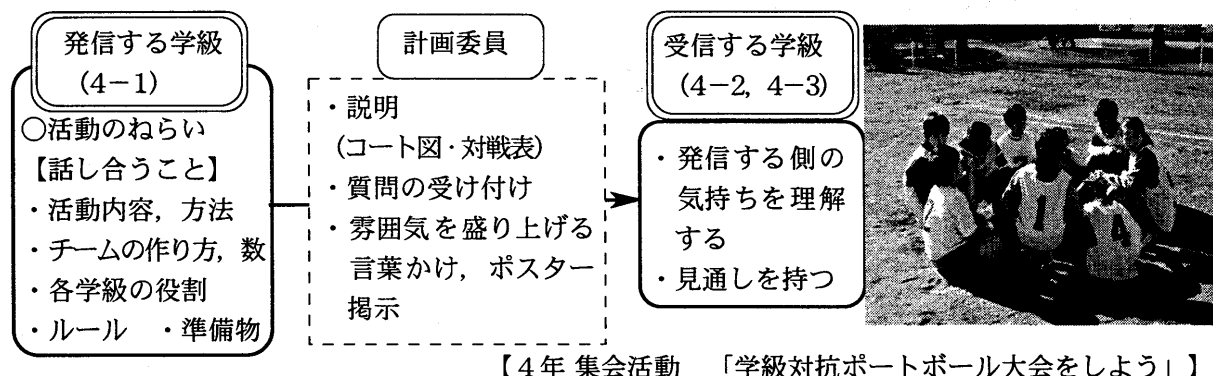
そこで、活動の過程や振り返りの場面で、「もっと」の思いを持てるように言葉かけなどを工夫し、学びの視点を広げたり深めたりしていけるようにする。また、「もっと」の思いを生かした活動から学びを実感できるように、教師は適切に支援していくようにする。

ア 「もっと」の思いを生かし、学びの視点を広げた活動の展開

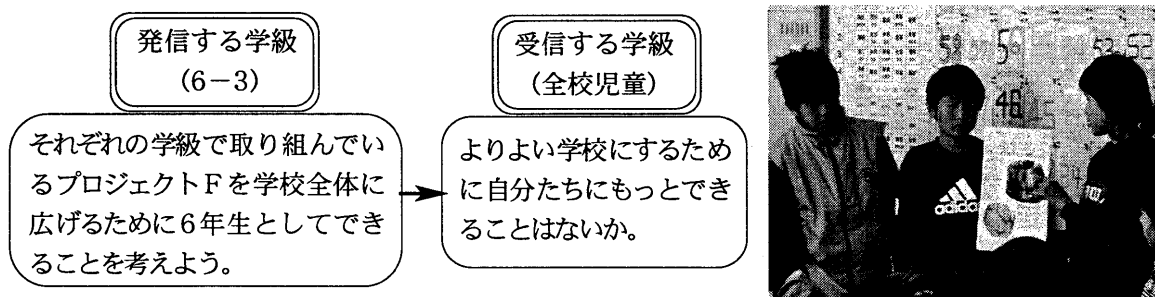
子供たちの「もっと」の思いを引き出すためには、日頃から子供の声を自由に響かせるようにし、子供の率直な思いを受け止めていく教師の姿勢が大切になってくる。また、学級や学校生活の現在の状況を知らせたり、問いかけたりすることで、子供の自由な発想から膨らむ「もっと」の思いを生み出すことができるだろう。そこで、学級内のこれまでの取り組みを見直し、「みんなでこんなことができたらいいな」「もっと続けていきたいな」などという「もっと」の思いを生かして、学級や学校での生活を楽しく潤いを感じられるような活動の展開を考えた。

これまで望ましい学級集団を目指して話し合い活動や集会活動を進めてきたが、みんなで取り組んでいこうとする活動内容や方法の視点を広げたり、深めたりしていけるようにする。さらに、学年や学校全体に働きかけたりしていく活動内容も積極的に取り上げていくようにする。きっかけづくりとして話し合い活動から実践化を図り、その結果をもとに生まれた「もっと」について再度話し合う活動を展開するなど、活動計画の中に、連続した内容を位置付けていくこともある。ここでは実践後の振り返りから自分自身の取り組みを見つめ直し、生まれてくる問いをさらに追究する過程を大切にしながら学びの視点を広げていくようにする。

実践例：① 体育で学習した内容「ポートボール」を学年全体で取り組む集会活動に生かしていく。



② 学校全体で取り組んでいるプロジェクトF（自分の学校に誇りを感じて生活していくことができるようにするために子供たち自身が考えて行うボランティア）の活動について、学校全体を視野に入れて話し合い、自分たちにできることを考えていく。



イ 活動から学びを実感するための教師の支援

子供の膨らんだ思いが、日常生活の発展・改善につながるよう活動過程を子供と共に考え、計画・運営にあたっては、活動を見守り、「育む」視点を持ち続けることを大切にしたい。そして、子供自身が学級全体に「もっと」の思いを積極的に話したり、かかわりを自ら広げて活動したりすることを楽しんでいけるように、教師のかかわり方を大切にしていけるようにする。

本番までの計画・準備の段階から、自分と相手の思いを分かり合えるように、相手の気持ちを尊重した話し方や聞き方についての具体的な支援を進める。かかわりを持つ際の学年の違いは、下級生の子供が上級生の子供に遠慮してしまうなど活動意欲にも影響すると思われる。よって、場に応じた適切な会話やしぐさ、行動ができるように学級内でスキルを獲得することを前提にしていける。また、集会活動では、自己中心的な感情が見られやすくなるので、相手の気持ちを尊重した言葉遣いや友達の姿からよさを見つけることから進め、活動後につかんだ気づきを学級全体、さらには、かかわりの合った学級へ発信していくようにする。

3 成果と課題

成果として、学級という枠を越えてかかわり合いを持つことで、集会活動においては学級内で得られなかった活動の喜びを実感し楽しさを広げていく姿が見られたり、係活動においては新しい発想や情報を得て自分たちの係活動がより充実したりするようになった。また、子供たちの「もっと」の思いを生かし活動を展開してきたことで、自発的・自治的な取り組みが見られるようになってきた。

今後は、学級活動でつかんだ学びの実感をもとに、児童会活動や学校行事などへと活動の視野を広げ、自主的に他とかかわりを持ち、活動する喜びを互いにつなげていけるような実践的な態度を育てていきたい。